都会で

——或は千九百十六年の東京——

芥川龍之介

青空文庫

一

風に靡いたマツチの炎ほど無気味にも美しい青いろはない。

二

如何に都会を愛するか?——過去の多い女を愛するやうに。

三

雪の降つた公園の枯芝は何よりも砂糖漬にそつくりである。

四

僕に中世紀を思ひ出させるのは厳めしい赤煉瓦の監獄である。若し看守さへゐなければ、馬に乗つたジアン・ダアクの飛び出すのに遇つても驚かないかも知れない。

五

或女給の言葉。――いやだわ。今夜はナイホクなんですもの。

註。ナイホクはナイフだのフオオクだのを洗ふ番に当ることである。

六

並み木に多いのは篠懸である。橡も三角楓も極めて少ない。しかし勿論派出所の巡査はこの木の古典的趣味を知らずにゐる。

七

令嬢に近い芸者が一人、僕の五六歩前に立ち止まると、いきなり挙手の礼をした。僕はちよつと狼狽した。が、後ろを振り返つたら、同じ年頃の芸者が一人、やはりちやんと挙手の礼をしてゐた。

八

最も僕を憂鬱にするもの。——カアキイ色に塗つた煙突。電車の通らない線路の錆び。屋上庭園に飼はれてゐる猿。……

九

僕は午前一時頃或町裏を通りかかつた。すると泥だらけの土工が二人、瓦斯か何かの工事をしてゐた。狭い路は泥の山だつた。のみならずその又泥の山の上にはカンテラの火が一つ靡いてゐた。僕はこのカンテラの為にそこを通ることも困難だつた。すると若い土工が一人、穴の中から半身を露したまま、カンテラを側へのけてくれた。僕は小声に「ありがたう」と言つた。が、何か僕自身を憐みたい気もちもない訣ではなかつた。

十

夜半の隅田川は何度見ても、詩人S・Mの言葉を越えることは出来ない。——「羊羹のやうに流れてゐる。」

十一

「××さん、遊びませう」と云う子供の声、――あれは音の高低を示せば、×× San Asobi-ma show である。あの音はいつまで残つてゐるかしら。

十二

火事はどこか祭礼に似てゐる。

十三

東京の冬は何よりも漬け菜の茎の色に現れてゐる。殊に場末の町々では。

十四

何かものを考へるのに善いのはカツフエの一番隅の卓子、それから孤独を感じるのに善いの

は人通りの多い往来のまん中、最後に静かさを味ふのに善いのは開幕中の劇場の廊下、……

（昭和二年二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行
1971（昭和46）年10月5日初版第5刷発行
入力校正：j.utiyama
1999年2月15日公開
2003年10月7日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

都会で

――或は千九百十六年の東京――

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　芥川龍之介
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/